

春休みに入り、哲学の授業がむなしく終わり哲学通信も宙に浮いたままになってしまったので、このままだとせっかく今まで苦勞して積み重ねてきた（この表現には少々誇張がありますが）哲学を学ぶ習性が失われてしまいはいせぬかと心配して、休み中ですが一通したためようと思いました。

前回、と言ってもかなり昔ですが、実体と偶有性ということを話しました。きっと「なんじゃ、これは。雲をつかむようなナンセンスな話しや」と鼻で笑った人もいたと思います。こういう反応は、今まで実証的な学問（確かめることのできるデータに基づいた学問）しかしてこなかった君たち（と言うよりほとんどすべての現代人）には無理からぬことです。私も最初そう思いました。

なぜこういった印象を受けるかということ、哲学が存在するもの全体を、全体的な仕方ではつかもうとするからです。そういうふうにして出てくる結論は、自然科学や数学的な仕方では確証できない。この面を、しつこいですが、もう一度説明したいと思います。でない、「こんなナンセンスな話は勉強する価値なんかない」と心の中で思われ、授業放棄をされると困るので。

さて、私たちを囲む世界は、絶えず変化しています。「行く川の流れは絶えずして、・・久しくとどまることなし」です。別の言葉で言うと、私たちが目にするすべてのものは「相対的 relative」です。相対的の反対の言葉は、「絶対的 absolute」と言います。相対的とは「時間によって変化し、初めがあり終わりがあること」、絶対的とは「変わらないこと」と言い換えることが出来るでしょう。世界が絶えず変化していると聞いても、「それがどうした。別にかまへんやんか」と何の問題も感ぜず人生を過ごす人もいます。でも、それを見て「この相対的な世界の裏に、変わらない絶対的なものがあるのでは」と興味を示す人もいます。タレスを筆頭とするイオニアの哲学者たちがそうでした。彼らは、移りゆく世界の裏に何か根源となる変わらないものがあると考え、それを追求したのです。これが「知恵を愛する」という意味の「フィロソフィー」と呼ばれたと以前話しましたが、この探求はギリシアに始まり西洋の歴史に連綿として受け継がれたのです。

しかし、目に見えないものを探求するとは言え、ただ頭に浮かぶ思いつきや瞬間的な印象を並べるだけならば、それは学問とは言えません。しっかりと現実世界を観察し、吟味して、論理的に理論を構築して行ってこそ学問になるのです。先ほど「哲学の結論は自然科学や数学のような確証はできない」と言いましたが、それは何の確証もいらないと言うわけではありません。哲学の結論も現実と照らし合わせて合っているかどうかを見ることはできます。例えば、実体と偶有性というような区別が本当かどうか、私たちの経験で確かめてみる必要があります。そうしたら、この理論は現実に当てはまるということがわかるでしょう。もし当てはまらないなら、哲学なぞ時間の無駄としてうち捨てましょう。

さて「理論と現実が当てはまるということが真理だ」と言えば、みんな賛成してくれると思います。ところが、実はこの「真理とは何か」という根本的な問題で、西洋の古代中世と近代で大きな断絶があるのです。その断絶を引き起こしたのが、ご存じルネ・デカルト（1596~1650）です。彼も相対的なこの世界の中で変わらないものは何かと追求した一人です。そしてその不変の原理として、「我思う、故に我あり」を見つけたのです。「考えとるさかいに、ある」となる。つまり、「考え」の方が「有る（存在）」より先に来ることになった。でも本当は「我あり、故に我思う」ですよ。ともかく、このデカルトの変換によって、哲学は周囲の世界を観察して吟味することから始まるのではなく（そもそも、彼は世界を知ることは無理だとした）まず自分の内側を観察することから始めねばならなくなりました。では、真理はどうなるのでしょうか。彼の言い分は、真理とは「明晰判明な概念」だ、ということです。つまり、頭の中で「はっきりとした概念」が見えれば、それが真理だということです。例えば、数学の

定理や結論がわかりやすい例でしょう。ピタゴラスの定理など、これ以上ないくらいははっきりしているでしょう。

でも、こうなると各自が勝手な真理を言い立てることになる危険があります。デカルトには明晰判明に見えたかも知れないけれど、他の人にはそう見えないことだってたくさんあった。そこで、彼に続いた哲学者たちは、まず自分の考えから出発点するという点だけをまねして、それに続く考えはそれぞれが自分勝手に組み立てていきました。その結果、デカルトが「哲学に色んな考えがあるのはけしからん」と嘆いていた、哲学の不統一はもっとひどいものになったのです。「自分の考え」から出発するという哲学を内在論と言います。思想というのは新しく作り出すのは難しいですが、ひとたび新しい思想ができるとそれはどんどん過激になるのが普通です。つまり弟子は先生よりもっと過激になる。デカルトの後、内在論の傾向はますます強くなり、ヘーゲル(1770~1831)に至って、行き着くところまで行ったという感じです。ヘーゲルは現実世界は頭で考えるとおりにあるのだとし、世界の歴史は絶対理念(だいたいこれがいったい何なのかわからない)が完成される歴史だとして、「絶対理念は最初自らを自然に変え、そこで自己意識を失う。続いて、それは自らを人間において表現し、そこで理念は人間の考える能力のおかげで科学、歴史、および哲学を通じて再び自己に帰還する」と結論した。ヘーゲルの思想には、それが深遠だとして「ありがたや、ありがたや、あやかりたい、かやつりたい」と言ってあがめる人と、逆に徹底的に批判する人がいて、後者はこういう理論を「無思想なおしゃべりを哲学的考えと思わせるようにした」(ショーペンハウアー)とか「仰々しいわけのわからぬ言葉の魔術」(ラッセル)とこき下ろすのですが、私もそう思います。彼自身、死ぬ間際に「私を理解した人は今までただ一人しかいなかった。だが、彼もまた私を本当に理解していなかったのである」と言ったそうですから。



ヘーゲルは「わしはすべてを説明した。つまりわしは哲学を完成したちゅうわけや。わしの後には哲学はもうない」と豪語したそうですが、彼が死ぬと、弟子たちは分裂してしまいました。彼が言う絶対精神は国家のことだと考えられ、この思想から20世紀にそれまでのいかなる専制国家でも見たことのないような非人間的な恐怖政治が支配する共産主義国家とファシズム国家が生まれたのです。

もちろん、内在論の哲学者たちも、鋭い直感や深い洞察によってなるほどと頷けることを言います。もしそうでなければ、まったく一顧だにされないでしょう。しかし、その考えの全体は頭の中で考えたひとりよがりな思想だと言えるでしょう。それゆえに、ヘーゲル以降、哲学自体が馬鹿にされました。「こんな無意味なおとぎ話は捨て置いて、本当に役に立つ自然科学や歴史学を深めよう」という潮流が思想界を支配するようになったのです。また、哲学が個々の学問を指導する地位を失ったので、哲学に替わって全学問の指導的地位を占めようとする学問が現れました。すべてが自然科学によって説明できるとする科学主義。歴史がすべてを説明するとする歴史主義、このほか心理学や社会学なども名乗りを上げました。けれどすべての学問の基礎となるのはやはりすべての存在を存在として探求する学問以外にはありえない。それが哲学(正確には形而上学。形而上学についてはまた説明します)なのです。現代の大きな問題は、この形而上学が近代の偉大な哲学者と言われている人たちの失敗によって、権威を失墜させたままであることだと言われます。

そこで、まだ素朴な常識をもって現実世界の研究に励んだ、古代ギリシア人とその流れを汲むスコラ哲学者の考え方をまずみなさんに紹介したいと思っています。それが「無意味な言葉の遊び」かどうか、私の説明することをみんなの経験と照らし合わせて自分で判断してくれば幸いです。